2014年度 修了

自閉症スペクトラム障害を持つ子供における
対象物の向きと既知刺激の条件性弁別による「心的回転」

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害･行動分析クラスター
中川　あづさ

序論　自閉症スペクトラム障害の特徴の1つに，他者の視点に立つことの困難さが挙げられる。「他者視点」や「心の理論」の基礎に，「心的回転」という能力があることが示唆されている。心的回転の重要性を指摘する研究はあるものの，どのような介入が「心的回転」の学習を促すかを明らかにする研究は少ない。そこで，本研究では「心的回転」を介入可能なものと捉え介入方法を考案した。

目的　介入では対象物の向きと命名可能な既知の絵カードとのマッチングを行う。この介入により，心的回転テスト不通過の参加児が介入前より心的回転テストに正答することができた場合，対象物の向きを命名することができることが「心的回転」に必要な能力であると言うことができる。研究の目的は，(1) 介入の効果を検討し，(2) 介入を通して「対象物の向きに対する命名により『心的回転』が可能になる」という仮説を検証し，(3) 「心的回転」を構成する要素を明らかにするという3点であった。

方法　**参加児**　自閉症と診断された小学5年生女子1名（参加児A，研究1)，小学1年生男子1名，年長の女子1名（参加児B, C，研究2）であった。　**独立変数・従属変数**　独立変数は介入（心的回転トレーニング)，従属変数は心的回転テストの得点とした。　**手続き**　**プレテスト**　実験者は参加児から見て正面に置かれたテディベアに箱を被せて90度，180度，270度，360度の角度にターンテーブルを回転させ，箱の中のテディベアがどうなったか写真カード選択で回答を求めた。　**介入**　参加児にとって親しみのある命名可能な絵カードを対象物の向きとマッチングさせた。　**ポストテスト**　介入の効果を確かめるためにプレテストと同様の手続きで行った。

結果と考察　参加児Aはプレテストで8%であった正答率がポストテストでは正答率が67%，参加児Bはプレテストの正答率が0%，ポストテストでは正答率17%，参加児Cは，プレテストの正答率が33%，ポストテストでは正答率42%であった。結果から，参加児Aにおいては介入の効果が見られ仮説が支持されたが，参加児B, Cについては介入の効果が認められなかった。考察では，介入に足りなかった点を検討することで，「心的回転」の構成要素を明らかにすることを試みた。